トウ・トゥアン君　１１歳（事故当時）

自宅のすぐ裏で友達と走りまわって遊んでいるときに藪のすぐ下に埋められていた地雷を踏んでしまった。右足首より先を爆発で吹き飛ばされた。

バッタンバン州、プノンプルック郡。タイ国境に面し、カンボジアでも珍しく山あいに位置したすがすがしい景色が広がるところである。そんな土地柄、農家も稲作より芋やとうもろこし、キノコの栽培をしている者が多く見られる。トゥアン君も幼い頃からこの豊かで美しい環境に囲まれて幸せに育ってきた。悪魔の兵器さえなければ誰もその幸せに疑いをもたなかったであろう。

雨に恵まれたタイ国境付近は森も多く、緑豊か

地雷はこの藪の下に埋められていた。民家と目と鼻の先である。

2005 年 2 月 17 日の昼下がり、トゥアン君はいつものように近所の友達と家の裏の畑で遊んでいた。そこはトゥアン君たちが毎日のように遊んでいる場所である。そしてその日も仲の良い友達数人と元気に走りまわっていた。そのとき、トゥアン君が藪の影にあった地雷を踏み、それは直ちに大きな音とともに爆発した。トゥアン君は体にすさまじい衝撃を感じ、その後、気を失うことこそ無かったが、ただ事ではないことがわかり、大きな恐怖に襲われたという。現場にいた友達がすぐに助けを呼び、近所の男性が現場へ向かった。その後、事態を重く見たその男性が現場近くで地雷撤去活動をしていた CMAC（政府系地雷撤去団体）に連絡し、トゥアン君は CMAC の４WD でバッタンバンの EMERGENCY（イタリアのＮＧＯが運営する救急病院）におよそ５時間かけて搬送された。そして EMERGENCY に到着後、すぐに手術が行なわれた。トゥアン君の右足は粉々に破壊されており、切断せざるを得なかった。それから約 1 ヶ月

半入院した後、自宅に戻った。事故当時周りで遊んでいた友達には幸いなことに怪我は無かった。

松葉杖での歩行はまだ幼いトゥアン君にとって困難

トゥアン君は 13 才ではあるが、いまだに小学校１年生。一般的な小学校高学年の子どもたちと同じくらいの年齢だ。都市部ではこのようなことはありえないが、田舎ではよくある。トゥアン君は毎日学校に通ってしっかり勉強し、家に帰れば近所の仲の良い友達と遊ぶ。そして家の手伝いや畑仕事も行なう。それは事故前も事故後も変わることはないが、右足を失ったことにより、何をするにも苦労するようになったという。義足はあるが、以前作ってもらったものはサイズが合わなくなってきており、装着すると痛みを感じるので使用していない。今は専ら松葉杖を使って移動している。幼いトゥアン君にとって、これが今一番大変に感じることだという。事故以来、病院には行っていないが、１０月（我々の訪問日の約１ヶ月後）にバッタンバンの ICRC（国際赤十字の運営する義足義手リハビリセンター）に行き、新しい義足を作ってもらう予定。子どもの地雷被害者は体が成長段階にあるため、足や手の損傷部を骨が突き破ろうとし、継続的に治療を行なわなければならない。また、義足や義手のサイズもすぐに合わなくなるので、トゥアン君のように繰り返しつくってもらう必要があるのである。

トゥアン君のお父さんは息子の将来が心配。

トゥアン君の家族は６人で、父が 44 歳、母が 39 歳。トゥアン君は上から３番目の子である。事故当時の様子についてお父さんに説明していただいた。事故が起こった時間帯はは畑に出ていたので、息子が地雷被害にあったことを知ったのは、病院に搬送されたあとだった。息子のことがとても心配で、生けていてくれ、と祈りつづけた。そして、事故が起こる前までに地雷のことについて何も教えていなかったことをすごく後悔したという。息子が事故にあった 2005 年ごろは村にはまだ無数の地雷が埋まっており、それまで地雷被害者が多く出ていた。家の周りはほとんど地雷原だった。それからは（息子の事故後）、CMAC が周囲で撤去作業を始め、地雷回避教育も行なっており、被害者は少なくなったという。それでもこの村には過去の事故による多くの地雷被害者がおり、中には差別を受けて傷ついている人もいる。自殺しようとする人もいる。それがとても惨めでかわいそうだという。トゥアン君のお父さんの家業は農家であるが、大した収入は得られていない。その他、休閑期には日雇いの仕事をして１日に約 6000 リエル（180 円）の収入があることもある。それでも満足な生活はおくれておらず、この先、家族が上手くやっていけるのか心配。特に障害者を抱えた息子の将来を心配している。

左上：トゥアン君の家

右上：事故当時を振り返るトゥアン君

左下：トゥアン君と仲良しの友達

右下：事故現場に立つ由見。撤去後と分かってはいても恐怖を感じた。

トゥアン君にとって今一番楽しいことは友達と遊ぶこと。当時の事故現場の地雷撤去作業はすでに完了しており、そこでも遊んでいる。そして将来の夢を聞くと、「まだわからないよ」と言った。ただそのあと、「なんでもやりたいな」と積極的な答えが帰って来たことが嬉しかった。